

新説「桶狭間の戦い」…信長には援軍がいた!!

これまで桶狭間の戦いは、織田信長の奇襲作戦が成功して勝利したというのが定説だった。しかし、最近になって新たな発見からそうではなかったという見方が浮上した。つまり、信長は用意周到に準備して情報を集めることで勝利したというのだ。

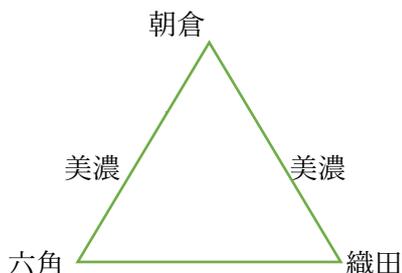
1 清須城下の発掘調査から

鉄を造るさいに出る不純物である「鉄滓(てっさい)」が発見された。

このことは清洲城下には鍛冶屋があって、武器の製造をしていた証で、信長はオリジナルの武器を造っていた。それは、一般の槍が3mほどなのに対して6m30cmもの長柄槍。槍は突き刺す武器のように考えがちだが、この槍は離れた位置から振り下ろすことで、相手を叩く武器として使われた。ちなみにこの槍を振り下ろして数枚の瓦などは粉みじんに砕けることが分かった。槍とは突くものではなく叩く武器だった。

2 長福寺の資料から新事実が

お寺から桶狭間の戦いの戦死者名簿が見つかった。そこには、近江の六角氏の武将の名があったという。つまり、織田軍には隣の六角氏が応援していたというのだ。当時、加賀の朝倉と近江の六角と織田は共に美濃と対峙していた、つまり、同盟関係だった。



・今川の大軍によく勝てたというが、30年後の太閤検地では
今川……………70万石
織田……………56万石 さほどの差ではない。

織田には援軍もあり、経済力も大きな差はなかった!!

① 義元の狙いは大高城!!

- ・桶狭間← 4km →大高城を巡る攻防だった。大高城は海に面しており、伊勢湾の経済を握ろうとした!! この城、元々は織田方であったが今川がとったもの。これに対し、信長は着々と手を打っていた。
- ・信長は今川の攻勢を押しとどめるべく、付城を配した。大高城には丸根砦、鷲津砦を築き、鳴海城には丹下砦、善照寺砦、中島砦を築き包囲網を敷いた。

② まとめると

- ・織田は弱小ではなかった
- ・誘い出したのは信長 …………… 義元はこの時、内政は息子に任せて自分は軍事に専念していた

- ・信長は勝つべくして勝った … 狭い場所は大軍に不利 記録にはぬかるみとあり深田に足を取られる

上記の1、2をさらに説明しているのが….

3 名古屋城調査研究センター「原史彦氏の見解」

① 信長に六角氏が加勢した

桶狭間で今川義元の菩提を弔う長福寺に、「桶狭間合戦戦死者書上」という記録が伝わっています。あくまで地元伝承の記録ではありますが、個々には今川方の死者 2753 人に対して、「信長勢討死」は 990 人余と記されています。

信長勢の動員が 2000 人程度ならば、半数が討死したことになり重傷者を含むけが人も加えれば、信長勢の被害はほぼ壊滅に近い状態になる。興味深いのはこの死者の中に「近江国佐々木方加勢」として 272 人が含まれている。「近江国佐々木方」とは六角氏のことで、信長方の戦死者の中に六角氏の援軍の数も含まれているという見解は、これまでの通説を大きく変える内容と言える。

② 他の資料にも信長に援軍ありと記されている

今川方が討ち取ったとされる六角氏援軍武将用の「佐々木形」の鎧も伝わっており、この鎧の奉納記録には 2300 人余の援軍があったと記されています。信長軍 2000 人と 2300 人で 4300 人なら、今川軍本体 5000 人と互角の戦いと言えます。しかし、いずれも後世の記録のため、その信憑性には疑問符が付くものの、当時の記録である「六角承偵条書写(ろっかくじょうていじょうしょうつし)」には、桶狭間合戦当時、織田家と六角氏とは連携関係にあったことを示す記述が見られます。

※「六角承偵条書写」

六角義賢(よしかた)が子の義弼(よしすけ)の重臣に送った怒りの書状の写しのこと。義弼が美濃の齊藤たつおきの娘をめとり、齊藤家と同盟を結ぶことに強く反対する内容。この記録は桶狭間合戦の二か月後永禄3年7月20日付けであり、まさに合戦勃発時は信長と近江六角氏・越前朝倉氏は良好な関係だったことを裏付けます。

③ この戦いは信長が周到に準備して、信長が仕掛けたと考えられる

信長が家督を継いだ際、鳴海城主は今川方に寝返りましたが、この時点ではまだ織田家をまとめ切れていない信長は、これに対応することが出来なかった。しかし、その後勢力を拡大し尾張北部をほぼ支配下に置いたことで、鳴海方面の攻略に取り掛かります。今川に対抗するために鳴海城付近に丹下砦・禅昌寺砦・中島砦を、大高城付近に丸根砦・鷲頭砦を築きます。

この事態は今川方にとっては領地侵犯行為にあたるため、当然、二つの城を救援するために軍勢を動かすことになります。このように、鳴海城と大高城が信長方に包囲されたことが、合戦の原因だったと考えられます。